莎草研究 No. 20: 59−62 (2018).
J. Jpn. Cyperol. (20): 59−62 (2018).

【短報】

ダイセンアシボソスゲの現況 –2016 年 7 月–

坂田成孝[1]・矢田貝繁明[2]

([1]鳥取県八頭郡[redacted]、[2]大山自然歴史館: 〒689-3318 鳥取県西伯郡大山町大山 43)

Shigetaka SAKATA[1] and Shigeaki YATAGAI[2]: *Carex scita* var. *parvisquama* at Mt. Daisen, Tottori Prefecture –July 2016–

([1][redacted], Yazu-gun, Tottori [redacted], JAPAN; [2]Daisen Museum of Nature and History, 43, Daisen, Daisen-cho, Saihaku-gun, Tottori 689-3318, JAPAN)

Abstract:
Carex scita Maxim. var. *parvisquama* T. Koyama (Cyperaceae) at Mt. Daisen, Tottori Prefecture, was observed in July 2016. Only one individual was remained from three individuals in 2015.

Keywords:
Carex, *Carex scita* Maxim. var. *parvisquama* T. Koyama, Tottori Prefecture

はじめに

ダイセンアシボソスゲ (*Carex scita* Maxim. var. *parvisquama* T. Koyama) は、1955 年に小山鐵夫により、ミヤマアシボソスゲ (*C. scita* var. *scita*) の変種として記載された (Koyama 1955)。その後本種は、1970 年清水寛厚氏による目視の報告はあったものの、近年までその生育状況は不明であった。著者の一人矢田貝は、2011 年 7 月に大山一ノ沢上部の崩壊地において本種を発見し、星野卓二氏（岡山理科大学）により写真確認がなされた。その後、2012 年 7 月に星野氏、正木智美氏（岡山理科大学）および勝山輝男氏（神奈川県立生命の星・地球博物館）が現地で本種を確認し、1955 年以降実に 77 年ぶりの再発見となった（永松ほか 2013)。その後も筆者らはダイセンアシボソスゲの生育地の継続観察をおこなっている。

2011 年に矢田貝が発見したダイセンアシボソスゲの生育地（一ノ沢上部）は、その後崩壊してなくなった（永松ほか 2013）ものの、2014 年にはその地点の上部（大山山頂部）にある自生地を新たに発見し、報告した（坂田・矢田貝 2015)。今回は、2016 年 7 月におこなった調査の結果について報告する。

調査方法

2016 年 7 月 7 日に、大山山頂部と山頂一ノ沢上部で現地調査をおこなった。現場は崩壊地の急斜面であるため、双眼鏡による観察のみの調査をおこなった（図 1)。

結果報告

図 2 は、坂田が大山山頂部の群落を望遠レンズで撮影した写真である。ダイセンアシボソスゲは、山頂の記念碑より 30 m 直下の下部に一株だけ花序をつけている個体を確認することができた。この場所は 2014 年に発見した場所とほぼ同じところである。

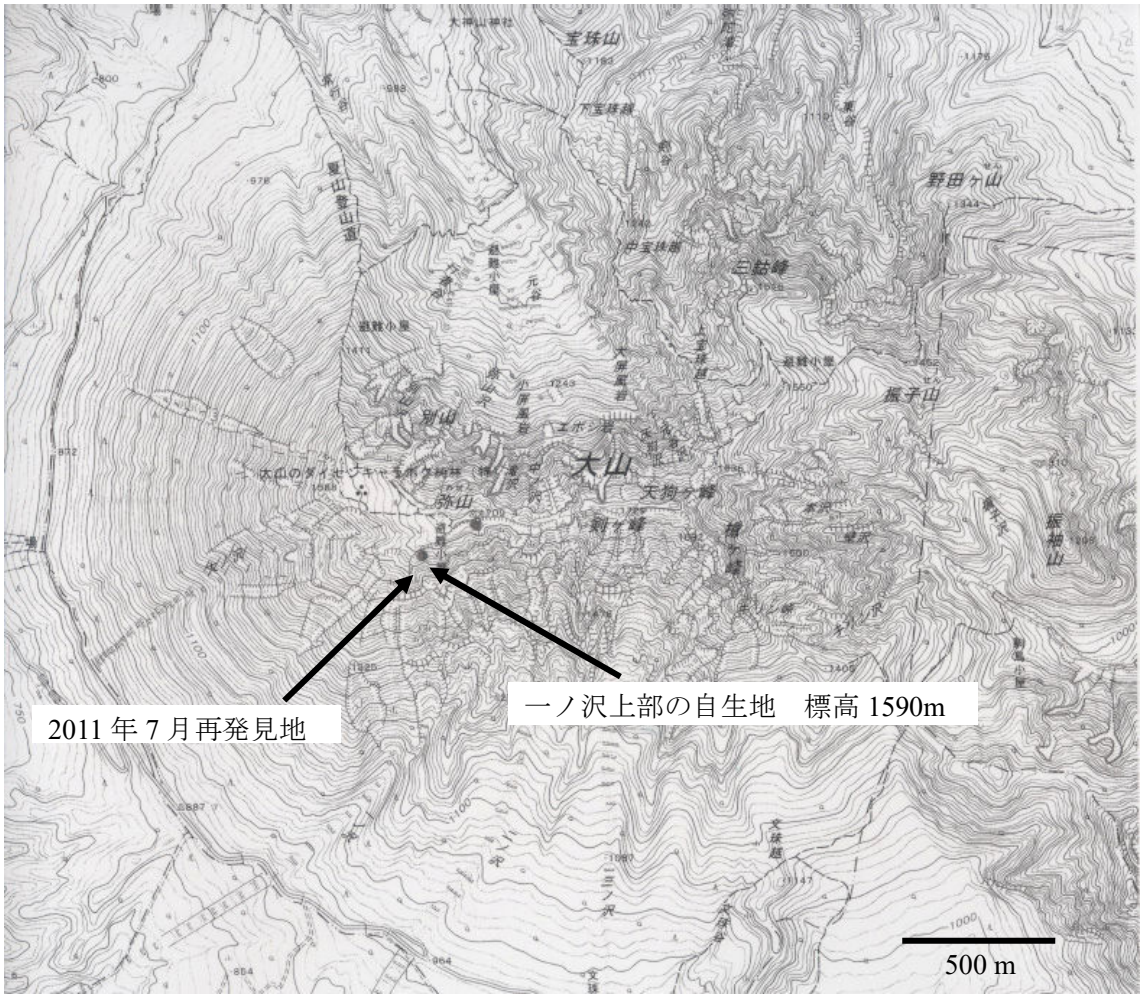

図 1. 大山山頂付近のダイセンアシボソスゲ生育地．現在の生育地は、2011 年 7 月再発見地の上部尾根の北側、山頂直下の小さい尾根 (標高約 1570 m) にある. 国土地理院　昭和 50 年 4 月 30 日発行　1:25,000『伯耆大山』を改変.

2014 年には花序をつけた個体を 3 個体確認したが、今回観察した個体が 2014 年のものと同じ個体かどうかは分からなかった。生育地周辺の崩壊はそれほど進んだとは見えなかったが、斜面の岩礫の流失が進んでいるため、周辺の草地全体の生育が悪くなっているようで、生育環境が悪化している可能性もあった。

一ノ沢上部の群落は、生育範囲が 2 年前に比べかなり崩れ落ちて狭くなっていた。草地の下の部分が崩落して消失しているのでザイルなしでは下りることができず、近くで観察することはできなかったものの、今回もダイセンアシボソスゲを確認することはできず、ダイセンアシボソスゲはこの群落からは消失したものと思われた。

ダイセンアシボソスゲが矢田貝によって 2011 年 7 月再発見された時に撮影された写真をもとに、2011 年当時の自生地の状況を確認した（図 3, 4）。ダイセンアシボソスゲは、崩壊に面した沢の草地の端に、ヤマヤナギの根に支えられて生育していた。

図 2. 大山山頂直下の群落 (2016 年 7 月 7 日坂田撮影). 矢印はダイセンアシボソスゲ.

図 3. 2011 年 7 月の生育地の状況.
矢印はダイセンアシボソスゲの位置.

図 4. 2011 年 7 月のダイセンアシボソスゲ.

図 4 は、坂田がその姿を草地に腹ばいになって 90 mm のマクロレンズで撮影したものである。ところが翌年 2012 年 7 月に現地を訪れたとき、この群落は、下部の岩礫の流出にともない、崩落により周辺の草地とともに消滅し、その後この場所でダイセンアシボソスゲを観察することはできない。

著者らは、ダイセンアシボソスゲの再発見から現在まで、その生育状況を継続して観察

してきた。このわずか 7 年の間においても、目まぐるしく変化する大山の自然崩壊とともに生き抜いているダイセンアシボソスゲの姿を見ると、自然に対する畏敬の念がわいてくるのである。

参考文献

Koyama, T. 1955. Les diagnoses des Cypéracées nouvelles pour la flore de Japon. J. Jpn. Bot. **30**: 129−137.

永松 大・坂田成孝・矢田貝繁明・谷亀高広・有川智己 2013. 大山に自生する希少植物の再検討. 鳥取県立博物館研究報告 (50): 45−53.

坂田成孝・矢田貝繁明 2015. ダイセンアシボソスゲの現況報告 −2014 年 7 月−. 莎草研究 (19): 13−14.